

## 論説

### 諷刺作家の誕生（一）

——初期ジョナサン・スウィフトの思想——

岸 本 広 司

#### はじめに

一六九九年八月にムーア・パークを去ったジョナサン・スウィフト (Jonathan Swift, 1667-1745) は、ララカーの教区牧師や聖パトリック大聖堂の参事会員になり、聖職者としての道を本格的に歩むことになった。これ以降のスウィフトは、聖務の傍ら著作活動を行い、やがて諷刺作家として世に出て行くことになる。本稿は、諷刺作家になるまでのプロセス、諸著作の執筆経緯、作品の読解等を通して初期スウィフトの思想を明らかにすることを目的とする。ムーア・パークのテンプル邸を去るまでのスウィフトについては、すでに別稿で考察してきた<sup>(1)</sup>。本論に入るに先立って、それまでのスウィフトを簡単に振り返っておこう。

ダブリンのトリニティ・カレッジで修士号取得を目指していたスウィフトは、名誉革命の余波でアイルランドが

騒然となったため、一六八九年一月にイングランドへ逃れた。レスターで暮らす母親のもとで数カ月間過ごした彼は、やがてサー・ウィリアム・テンプル (Sir William Temple, 1628-99) の屋敷に向かった。息子の将来を案じた母親が、テンプルを頼っていくことを勧めたのである。テンプルは、三国同盟やナイメーヘン条約の締結に尽力した一七世紀イングランドを代表する外交官である。端正な文体で多くのエッセイを書いた文人としても、庭園理論に一家言を持つ造園家としても、また、恋人ドロシー・オズボーン (Dorothy Osborne, 1627-95) の手紙の名宛人としても有名である。<sup>(2)</sup> スウィフトが訪ねたとき、テンプルはすでに一切の公職から退いて、ロンドン南部に接するサリー州ムーア・パーク (Moor Park) で隠遁生活を送っていた。スウィフトは、二二歳のときにテンプルの秘書となる。そして九九年八月まで、彼の屋敷で断続的に六年あまり過ごした。

スウィフトにとって、テンプルとの出会いは人生上の大きな出来事であった。ムーア・パーク滞在中、大陸にまで令名を馳せたこの英国紳士からさまざまな影響を受けるとともに、スウィフトにとって運命的な女性と言うべきエスター・ジョンソン (Esther, or Hester Johnson, 1681-1728) と巡り会っている。エスターはテンプル家の使用人の娘で、スウィフトより一四歳年下、病気がちであったものの聡明で愛らしい少女であった。テンプル家に入ったスウィフトは、教育係としてエスターに読み書きを教えたが、実はこの少女こそが、のちにスウィフトがステラ (Stella) の愛称で呼び、一連の書簡『ステラへの日記』(The Journal to Stella, 1766-68, writ. 1710-13) を書き送った恋人 (一説によれば秘密の結婚相手) である。

テンブル邸を訪れた翌一六九一年に、スウィフトは生涯苦められることになるメニエール病を発症した。彼は転地療養とトリニティ・カレッジへの就職活動を兼ねて、一時アイルランドへ帰った。同カレッジのフェローになることを希望していたのである。しかし症状は良くなり、就職も期待どおりにいかなかった。そのため、同年の暮れにムーア・パークへ戻った。当時のテンプルは、庭作りと執筆活動に専念していた。秘書としてのスウィフト

の主たる仕事は、テンブルの代筆や原稿の整理、フランス語やラテン語で書かれた手紙の翻訳であった。この仕事は、テンブルから歴史・政治・文学などの知識を吸収する絶好の機会となった。また、テンブルの蔵書を読みあさって勉学にいそしんだ。テンブルの影響下で、何編かのピンダロス風頌詩やヒロイック・カプレットを書いたものの時期のことである。

テンブルはスウィフトの能力を認めていた。その表れであろう、オックスフォード大学で文学修士号を取得させている。また、テンブルの名代としてケンジントン宮殿に派遣し、ウィリアム三世や側近に「三年制議会法」に関連してイングランド史を進講させている。だがこうしたテンブルの高い評価にもかかわらず、自尊心の強いスウィフトは、テンブル家で使用人扱いされることに耐えることができなかった。しだいにテンブルからの独立を考えるようになる。一六九四年五月には、テンブルの反対を押し切ってムーア・パークの屋敷を飛び出した。そして翌年の一月、北アイルランドのベルファスト近郊キルルト（Kilroot）の教区牧師になった。

こうして、スウィフトはテンブルからの独立を果たした。だが北アイルランドの寒村での生活は、二八歳の若者にとって必ずしも快適なものではなかった。「数カ月で飽きてしまい、イングランドへ戻った<sup>(3)</sup>」と自伝で書いている。キルルトでの滞在は、わずか一年あまりであった。九六年五月には、テンブルの屋敷に舞い戻っている。三度目のムーア・パークであるが、テンブルとの関係は良好であった。彼は今やテンブルにとって欠き得ぬ存在となっていた。スウィフトにとっても、このムーア・パーク期は豊穡であった。初期の傑作『桶物語』（*A Tale of a Tub*, 1704）を執筆して、諷刺作家としての礎を築いたのはこの時期のことである。また、一五歳になったステラを意識するようになるのもこの頃である。しかしながら、スウィフトに大きな転機が訪れる。一六九九年一月に、テンブルが七一歳で死去した。これによって、スウィフトはパトロンを失うことになる。そしてこのときを境に、スウィフトの新たな人生が始まるのである。

## 一 若き野心家

### 1 スウィフトの野心

テンブルの死は、スウィフトにとって人生の分岐点となった。ムーア・パーク時代は、良くも悪くもテンブルの影響下にあったが、これ以降、パトロンの遠慮したりその目を意識したりすることなく、自由にのびのびと生きていくことができるようになった。しかしそれは同時に、自分の人生は自分で切り開いていかなければならないことを意味するものでもあった。

一六九九年のテンブルの死からダブリンの聖パトリック大聖堂の首席司祭に就任するまでの一四年間は、スウィフトにとって地位と名誉を求めての長い闘いの日々であった。彼の野心は、イングランドで可能なかぎり高位の聖職に就くことであった。テンブルは生前、カンタベリかウエストミンスターの聖堂参事会員のポストをスウィフトに与えるという約束をウィリアム三世からとってくれていた。そこでスウィフトは、テンブルの死後ほどなくしてムーア・パークからロンドンに移り、約束の履行を求めて国王に請願書を提出することにした。その提出にあたって国王への口添えを約束したのが、テンブルと交友のあった五八歳のロムニー伯ヘンリー・シドニー (Henry Sidney, 1st Earl of Romney, 1641-1704) である。

ロムニーはオレンジ公への招聘状を書いた七名の貴顕の一人で、名誉革命を成功させた功労者である。革命後はウィリアム三世に厚遇され、軍人として重要ポストに就くとともに、一六九二年から九三年まではアイルランド総督 (Lord Lieutenant of Ireland) の地位にもあった。<sup>(4)</sup> こうした華々しい経歴の持ち主の斡旋である。当然スウィフ

トは大きな期待を寄せたことであろう。しかし、将来に関わる重要事をこの人物に委ねたのが間違いであった。ロムニーは道徳的に問題があり、仕事を黙々と誠実にこなしていくような人間ではなかった。彼を擁護していた神学者兼歴史家のギルバート・バーネット (Gilbert Burnet, 1643-1715) ですら、「彼はあまりにも道楽に耽つたので、心を集中させて職務を遂行することができなかった」と言っている<sup>(5)</sup>。はたせるかな、数カ月待っても朗報はなかった。責任意識の低いロムニーは、スウィフトのために何の骨折りもしなかったのである。スウィフトは自伝で、「ロムニー伯はスウィフト氏への強い友情を公言し、彼の請願を支援すると約束していた。ところが、年老いて意地悪く、誠実さや名譽の感覚を欠如したこの無教養な放蕩者は、王に一言の口添えもしなかった」と書いて<sup>(6)</sup>いる。

スウィフトは、ロムニーの空約束がよほど腹に据えかねたのであろう。この一件があった一六九九年に、「問題」 ("The Problem," 1746) と題した六〇行から成る諷刺詩を書いている<sup>(7)</sup>。諷刺されているのは、三人の愛人に囲まれた一人の貴族である。好色なその貴族は、欲情するとガスが腸内に充満し、やがて強烈な臭いを放つ獣的な人間として描かれている。この詩には鼓腸、肛門、放屁、悪臭といったスカトロジカルなイメージが横溢し、それ自体、放蕩貴族に対する辛辣な諷刺となっている。攻撃されているのは、言うまでもなくロムニー伯である。ロムニーはハンサムで、名だたる道楽者であり、多くの女性と情事を繰返していた。スウィフトは、彼の最初のスカトロジョー詩と言うべきこの「問題」で、ロムニーを発情すると特有の臭いを放つ動物と同一次元にまで引き下げている。そして本能だけで生きる畜類へと貶めることによって、約束を反故にされた悔しさを晴らしている。ちなみに、この詩の草稿には「恋をしているとき、かのロムニー伯シドニーは悪臭を放つ」 ("That Sidney, Earl of Romney Stinks, When He Is in Love") という副題が付けられていた。

つづいて、怒りと失意のうちにあったスウィフトは、第二代バークリー伯 (Charles Berkeley, 2nd Earl of Berkeley, 1649-1710) からある誘いを受けた。バークリー家のチャプレン (礼拝堂付き牧師) 兼私設秘書になって、アイルラ

ンドへ一緒に行かないかという誘いである。バークリー伯は外交官、グロスターシャーの首席治安判事 (Custos Rotarum)、枢密顧問官 (Privy Councillor) などを歴任した人物で、このとき五〇歳であった。その彼が、アイルランド高等法院判事 (Lord Justice of Ireland) に任命され、ダブリンへ赴任することになった。高等法院判事とは、アイルランド総督が不在なし死去したときに、一時的にその代理人として統治する高位の官職のことである。通常は二名ないし三名から成り、行政官の監督、治安の管理、官職・叙爵・年金に関する助言等を行うことを任務としていた。<sup>(8)</sup>バークリー伯がどのような経緯でスウィフトに声をかけたのかは明らかでないが、テンプル家を離れたスウィフトは経済的に早く自立しなければならなかった。またこのポストに就けば、総督府の置かれているダブリン城で政界の有力者と交わることができ、そこで培った人脈を通してより高い聖職位を得ることができるようにも思われた。かくして彼は、この誘いを即座に受け入れる。

一六九九年八月、スウィフトはバークリーに随行してプリストルからアイルランドへ向かった。だが今回も失望させられる結果となった。というのもスウィフトによれば、アーサー・ブッシュ (Arthur Bushe) という人物が「伯にうまく取り入って、秘書というポストは聖職者にふさわしくないばかりか、教会内での昇進だけを目指している人間にはそのポストは何の益にもならない、と伯に進言した」<sup>(9)</sup>からである。ブッシュは、アイルランド税関事務所に勤める役人であった。年収八〇〇ポンドの税務局長になりたがっていたが、猟官運動が不首尾に終わったため、方針転換してバークリーの秘書ポストの獲得に狙いを定めたのである。<sup>(10)</sup>ブッシュはスウィフトより年長で、経験も豊富であった。バークリーはスウィフト以上に使えると判断したのであるう、「下手な言い訳をしたあと、この職を他の人間「ブッシュ」に与えたのであった」<sup>(11)</sup>。バークリーとブッシュに対するスウィフトの怒りは激しかった。彼はこのときも、「発見」("The Discovery," 1746, writ. 1699) と題した二行連句の短詩を書いている。そして二人、とりわけ巧みに裏をかいたブッシュに諷刺の矢を放っている。<sup>(12)</sup>

世紀が変わった一七〇〇年一月末に、デリーの首席司祭 (Dean) が死去した。直ちに後任選びが行われることになった。任命権を持つのは高等法院の判事である。バークリー伯も当然その権限を有していた。北アイルランドに位置するデリー (Derry) は、アイルランド教会 (Church of Ireland) の中でも最も豊かな主教区の一つである。

バークリー家のチャブレン以外に職を持っていないスウィフトは、この首席司祭のポストを熱望していたことであろう。だが、結果はまたもや期待はずれであった。「私設秘書のポストをブッシュに横取りされて」数カ月経った頃、デリーの首席司祭の席が空いた。そのポストを決めるのはバークリー伯である。しかし、秘書「ブッシュ」が賄賂を受け取り、その首席司祭の席を他の人間「ジョン・ボルトン」に与えてしまった<sup>(13)</sup>。スウィフト伝の多くは、スウィフトのこの文章を基に人選の経緯を伝えている。とりわけ具体的なのは、トマス・シェリダン (Thomas Sheridan, 1719-88) である。シェリダンによれば、スウィフトはデリーの首席司祭職を自分に与えてほしいとバークリー伯に申し出た。だが伯は、その件についてはすでにブッシュと話がついており、彼がそれを別な者に与えることになっているようだ、ブッシュと話合ってもらいたい、と返答した。そこでスウィフトは、すぐさまブッシュと会って自分の希望を伝えた。するとブッシュは、あからさまに次のように言った。そのポストをある人物に与えると、一〇〇〇ポンドもらえることになっている。もし同額の一〇〇〇ポンド支払ってくれるなら、あなたにその席を与えてもよい。これを聞いたスウィフトは、この上ない侮辱と感じて激怒した。そしてバークリー伯とグルになっ<sup>(14)</sup>ているに違いないと考え、「こん畜生、二人組の悪党にしてやられた」と毒づきながら部屋から出て行った。

この件に関するスウィフトの記述、およびそれに基づいたシェリダンたちの説明は事実とはいささか異なっている。たしかに、バークリー伯は首席司祭の任命権を持っていた。だが高等法院の判事はほかにも二名いて、バークリー伯一人で選任できたわけではない。むしろこの一件には、ルイス・A・ランダ (Louis A. Landa) やアーヴィン・エレンブライス (Irvin Ehrenpreis) が言うように、デリー主教のウィリアム・キング (William King, 1650-

1729) とダブリン大主教のナーシサス・マーシユ (Narcissus Marsh, 1638-1713) が深く関わっていた。<sup>(16)</sup> スウィフトより一七歳年長のキングは、ダブリンのトリニティ・カレッジを出たあと聖職に就き、一六八九年に聖パトリック大聖堂の首席司祭(スウィフトの就任は一七一三年)、その二年後にはデリー主教、そして一七〇三年にはダブリン大主教にまで出世する人物である。キングはスウィフトと関係が深く、二人はしばしば衝突しながらも、やがてともにアイルランドの愛国者と呼ばれるようになる。いま一人のマーシユは、スウィフトがダブリンのトリニティ・カレッジに入学したときの学長で、学生たちに「学長の論理学」(Provost's Logic) と呼ばれた『論理学教程』(*Institutiones logicae: In usum juventutis academicae Dubliniensis*, 1681) の著者である。一六八三年に学長職を辞したあとはもっぱら聖職者としてのコースを歩み、九一年にキャシエル大主教、九四年にダブリン大主教(キングの前任)、一七〇三年には「全アイルランドの首座主教」(Primate of All Ireland) であるアーマー大主教にまで上り詰める人物である。<sup>(17)</sup>

ランダによれば、デリーの首席司祭が死去すると、キング主教は高等法院判事のバークリー伯とゴールウェイ伯(Henry de Massue, 1st Earl of Galway, 1648-1720) およびマーシユ大主教に後任の人選を速やかに行うよう要請した。キングが望んだのは、敬虔で思慮深く、学識豊かな人物が選任されることであった。キングの頭の中には、推薦したい候補者が五名いた。バークリーとゴールウェイには具体的な名前は伝えていない。だがマーシユには五人の名前を挙げ、その中から選ばれることを希望する旨伝えた。挙げられたのは、トリムの教区主任牧師ジョン・スターン (John Stearne [Sternel], 1660-1745)、コークのクライスト・チャーチの教区代理牧師エドワード・シンク(Edward Synge, 1659-1741)、ラトースとブラカーの教区代理牧師ジョン・ボルトン (John Bolton, c. 1656-1724) はか二名で、そこにスウィフトの名前はなかった。<sup>(17)</sup> 候補者の中で、最も有力視されたのはボルトンであった。彼はスウィフトより一一歳年長で、神学博士号を有し、聖職歴はすでに二二年、スウィフトよりはるかに有利な立場に



あった。しかしボルトンは、ゴールウェイ伯からオファーがあつたとき、当初はそれを断っていた。収入面で恵まれたラトースとララカーの聖職禄を放棄して、ダブリンから遠く離れた北部の主教区へ移動することなど、彼にはおよそ考えられなかつたからである。そこでマーシユは、ボルトンを説得するため、首席司祭職とラトースの聖職禄兼領を認めるという妥協案を高等法院に提示した。高等法院もその案を受け入れ、かくしてボルトンの就任が正式に決まつたのである。<sup>(18)</sup>

これが、デリーの首席司祭選任の経緯である。ボルトンは必ずしも首席司祭職を求めていたわけではないし、デリーへ行くのも決して望んでいたわけではなかつた。この点を考えるならば、ボルトンが一〇〇〇ポンドもの賄賂を渡して首席司祭の席を手に入れたとは考え難い。また、バークリー伯だけが任命権を持っていたわけでも、選考を主導したわけでもない。スウィフトは、そもそも最初から選考の対象外であつた。

当時、聖職禄兼領 (pluralism) はその弊害が指摘されながらも、多くの教区でごく一般的に行われていた。しかし、ラトースとデリーは一二五マイル以上も離れている。地理的にこれほど離れた教区の兼領は、さすがに望ましいことではなかつた。教区牧師職に就いていないスウィフトならば、兼領に伴う問題が起る心配などまつたくな。にもかかわらず、ボルトンが選任されたということは、この点でもスウィフトが最初から蚊帳の外に置かれていたことを意味しよう。したがってわれわれは、自伝の記述を顔面どおりに受け取るべきではない。バークリー家のチャップレンでありながら、スウィフトにはまつたく声がかからず、しかもかなりの自信家で、自分のような才能ある者には高い地位こそふさわしいと考える類の人間にとって、このような結果はどうい受け入れることのできない屈辱的なものであつた。しかも度重なつてである。ポストを獲得し損なつた原因は、自分の側にあるのではなく、あくまでも自分の外部に、この場合はバークリー伯とブッシュにあると考へてもさして不思議ではない。そのように考えることによって、己の弱点や問題を直視しなくても済むからである。自伝「スウィフトの家系」(「The

Family of Swift," 1755, writ. 1727 or 29) は、「[スウィフトが選ばれなかった] 表向きの口実は、彼が若すぎるというものであった。そのときすでに三〇歳になっていたにもかかわらず<sup>(19)</sup>」という文章で終わっている。実はこれも、スウィフトが自己弁護し、己を正当化するための一文であったと言うべきかもしれない。

人選を実質的に主導したキング主教やマーシュ大主教には、おそらくスウィフトの人間が気に入らなかったであろう。前述したように、キング主教が首席司祭にふさわしいと考えたのは、誠実で着実に職務をこなしていくタイプの人間であった。真面目さで通っていたマーシュ大主教も同様であった。彼らには、サー・ヘンリー・カペル (Sir Henry Capel, 1638-96) に推薦してもらってようやく手に入れたキルートの聖職禄を、そこでの生活に飽きたからという理由で、わずか一年あまりでいとも簡単に投げ出したり、より高い地位に就くことしか考えていない上昇志向の強い野心家は、デリーの首席司祭にふさわしい人間だとはとうてい思えなかったのである。<sup>(20)</sup>これが、スウィフトが最初から候補者のリストに入らなかった真の理由であろう。かくして、スウィフトは熱望していたデリーの席を獲得することができなかった。今回もスウィフトは失望を味わい、怒りを覚えることになった。だがそうしたスウィフトに光明が差す。ボルトンのデリーへの移動に伴って、彼の保持していたララカーの教区牧師の席が空き、そのポストがスウィフトに回ってきたのである。

## 2 ララカーの牧師

### (1) ララカー

ララカー (Laracor) とラトース (Ratoath) の聖職禄を兼領していたジョン・ボルトンは、デリーの首席司祭就任に伴って、ラトースよりも収入の少ないララカーを手放した。その結果、ララカーのポストが空席となったが、その席は程なくしてスウィフトに与えられることになった。口利きしたのは、おそらくバークリー伯であろう。ラ

ラカーはミーズ主教区 (Diocese of Meath) に属し、ダブリンから北西約二〇マイルの小さな村である。ラカーというのは、一般にアガー (Agher)、ラスベガン (Rathbegan)、ラカーの三つの教区を総称したものであり、スウィフトはそれら三教区の牧師に、正確にはアガーの教区主任牧師 (rector)、およびラスベガンとラカーの教区代理牧師 (vicar) になったのである。<sup>(21)</sup> 一七〇〇年二月二〇日付けの公式証書 (patent) により、彼が聖職禄を正式に受領したのは同年三月二二日のことである。<sup>(22)</sup>

ミーズ主教区は、住民の圧倒的多数がカトリック教徒であった。その点で、スウィフトがはじめて聖職に就いたキルルート教区の属する北アイルランドのダウン・アンド・コナー主教区 (Diocese of Down and Connor) が、スコットランドから移住してきた長老派が多数を占めていたのとは大きく異なる。だが両主教区とも、国教徒がわずかしかなかった点では同じであった。また多くの教会の建物が荒れ果て、手入れされず放置されたままになっていた点も同様であった。スウィフトがラカーに着任する七年前、ミーズ主教区にあった一九七の教区教会のうち、教会の建物が修繕されていたのは四三のみであったという。<sup>(23)</sup>

ラカーとアガーは互いに隣接するが、ラスベガンは両地から数マイル離れた教区である。いずれもダブリンに近く、馬を使えば半日足らずの距離であった。三つの教区の中で最も広いのはラカー、次いでラスベガン、最小はアガーである。ラカーはアイルランド独特の土地区画である一三のタウンランド (townland) から成り、面積は四一七五エーカー (一六九〇ヘクタール)、主に農地と牧草地であった。この教区の十分の一税から得られる年収は、少なくとも一〇〇ポンドであった。<sup>(24)</sup> ラカー教会は、ミーズ主教区の中心地であるトリム (Trim) の町から一・五マイルほど南方にあり、ラカー、アガー、ラスベガンの母教会 (mother church) である。教会堂は、前任者のジョン・ボルトンによって数年前に改修されていた。しかし牧師館 (manse) はなく、そのためボルトンは八マイルあまり離れたラトースで居住していた。<sup>(25)</sup> 他方、スウィフトが住んだのはトリムやダブリンである。このと

きのトリムの教区主任牧師は、デリーの首席司祭候補の一人として名前が挙がっていたジョン・スターンである。スウィフトはスターンと親しくなり、やがて彼らは強い関わりを持つようになる。

ララカーに次ぐ広さのラスベガンは、一〇のタウンランドから成り、面積は一四六一エーカー（五九一ヘクタール）であった。沿地と荒地が広がる土地で、年収は約五〇ポンドであった。<sup>(26)</sup> 教会には牧師館と聖職領耕地（glebe）が付属していた。教会の建物は一七世紀の初めに修繕され、以前は牧師が居住していた。だが他の多くの教会と同様、共和制時代に手入れされないまま放置され、スウィフトが赴任したときは屋根が剥がれるほど荒廃していた。<sup>(27)</sup> 最も小さなアガー教区は、面積一一〇エーカー（四五ヘクタール）で、ここから得られるスウィフトの収入は年二〇ポンドであった。五エーカーの広さの聖職領耕地には牧師館があった。しかし教会の建物は、ここも例に漏れず荒廃していた。<sup>(28)</sup>

三教区とも、国教徒の数はきわめて少なかった。ラスベガンには一人のプロテスタントもいなかったし、アガーも二、三名いただけで、ほとんどいないも同然であった。最も大きなララカーには、一六八二年の時点で何人かのプロテスタントが居住していた。だがそれも一六世帯にすぎず、信者数の少なさは深刻であった。<sup>(29)</sup> にもかかわらず、ララカー教区は思いのほか豊かであった。というのも一六世帯の中には、ギャレット・ウェスリー（Garret Wesley, c. 1665-1728）、ジョン・パーシヴァル（John Percival, d. 1718）（共にアイルランド議会の庶民院議員）、サー・アーサー・ラングフォード（Sir Arthur Langford, d. 1716）とった富裕なジェントリがいたからである。

スウィフトは自伝で、デリーの首席司祭のポストを獲得し損なった一件を述べたあと、「スウィフト氏は、全部合わせてもあの恵まれた「デリー」首席司祭の三分の一、いや現在では、六分の一の価値もない他のいくつかの聖職禄を与えられただけだった」と不満げに書いている。<sup>(30)</sup> しかし三つの教区から得られた収入の総額は、十分の一税や聖職領耕地の地代などを合わせると、パークリー家のチャブレン職、および後述するダンラヴィンの参事会員職も

含めて約二三〇ポンドであった。五年前のキルルートのときは一〇〇ポンドであり、それと比べればるかに有利な収入である。名家出身でなく、際立った経歴の持ち主でもない人間ならば満足すべきポストであろう。だが己の力に自信を持ち、それに見合う地位を求めるスウィフトのような野心家にはもの足りなかったのかもしれない。スウィフトは感謝の気持ちに乏しく、現状をそのまま素直に受け入れることのできない人間であった。仮に受け入れる場合でも、今回のように常に不平や不満の一言が伴っていたのである。

キルルート教会のあるアルスター地方のアントリム州が、荒々しく厳しい自然環境であったのに対して、ララカーの位置するミーズ州は、起伏の小さい穏やかな光景が広がっている。ケルト人の聖地であった有名なタラの丘(Hill of Tara)があるのもこのミーズ州である。同州の中心地であるトリムには、ボイン川沿いに、一二世紀にノルマン人によって建てられたアイルランド最大規模のトリム城(Trim Castle)がある。ララカーは、前述したように、古城のあるトリムの町から南方一・五マイルほどの所にあった。ララカーという地名は、アイルランド語で「堰のある場所」を意味する“Lathrach Cora”に由来するが、スウィフトはこの地で聖職者としての新たなキャリアを開始したのである。

この時代のアイルランド教会は、ダブリンを除けばどの教会堂も荒廃していた。そうした中でもミーズ主教区は、イングランド人が征服・定住した東部地方、いわゆる「柵で囲まれた地域」としての「イングリッシュ・ペイル」(English Pale)に含まれるがゆえに、ペイル外の地域よりはいくらかましであった。にもかかわらず、使用に耐え得る教会堂は全体の五分の一程度で、そのほかはまったく使い物にならないという有様であった。ララカー教会は、前任者のジョン・ポルトンが五年ほど前に修理しており、使用可能な五分の一の範疇に含まれてはいた。だが居住できる牧師館はなかった。ララカーの聖職禄を得た二カ月後、スウィフトはヴァリーナことジェーン・ウエアリング(Jane Waring, Varina, 1674-1720)に、ララカーは「トリムという町から一マイル以内、ここ『ダブリン』か

ら二〇マイルの所にあります。トリムに家を借りるか、現地〔ララカー〕に家を建てるかする以外に方法はありません。借りるのは困難でし、建てる方は、あまりにも貧しくて今のところ手がけることができません<sup>(32)</sup>」と伝えている。

こうして、新任牧師のスイフトが置かれた環境は必ずしも良いものではなかった。にもかかわらず、彼はこの新しい任地を気に入った。何年もかけて教会堂を修復し、敷地の景観に手を加えている。まず取りかかったのは牧師館の建設であった。一七〇三年の春に着手、当初は雨露をしのぐだけの粗末な建物であった。その後は数年おきに屋根の葺き替えをしている<sup>(33)</sup>。それでも、みすばらしさは一〇年経っても変わらなかった。スイフトは、国務大臣の職を解かれた直後のボーリングブルック子爵 (Henry St. John, 1st Viscount Bolingbroke, 1678-1751) に、「私の田舎の家屋は……荒れ放題です。部屋の間壁は崩れ、修理するために泥土と屋根を葺くために藁が必要です<sup>(34)</sup>」と書いている。

一般に「小屋」(cabin/cottage)と呼ばれたアイルランドの小屋住み農 (cottager/cotter) の家屋が、あまりにも粗末な作りで悲惨極まりなかったことはよく知られている。農業経済学者のアーサー・ヤング (Arthur Young, 1741-1820) は、「イングランドの豚小屋よりひどいあばら屋<sup>(35)</sup>」と形容している。当時の小屋住み農たちの実態については別な機会に詳述するが、スイフトの牧師館も、さすがに「豚小屋よりひどいあばら屋」ではなかったものの、最初はそれに近い破屋であったのかもしれない。瘦せ我慢であろうが、「大きくて立派な邸宅よりも、野外用ベッドと土間の方が良い<sup>(36)</sup>」と言っている。スイフトは、そうした粗末な牧師館に根気よく手を加え、次第に「小ざれいな小屋」(a neat cabin) へと変えていった。一七二三年にミーズ主教が教区を巡察 (visitation) した際の報告書には、教会の天井は板で上張りされ、床には石畳が敷かれて立派な建物になっていること、また境内の一部は石垣で、一部は溝で囲われていることなどが記されている<sup>(37)</sup>。

教会のすぐ近くには小川が流れている。スウィフトは溝を掘ってそこから水路を引き、堤防を作って遊歩道にした。そして柳の木を植え、のちにはリングやサ克蘭ボなどの果樹を植栽した。テンプルほどではないにしても、スウィフトもムーア・パークの生活の中で園芸の楽しさを感じていたのである。ララカーに着任してから十数年後、スウィフトはヴァネッサ、すなわちエスター・ヴァナムリ (Esther, or Hester Vanhomrigh, 'Vanessa', 1688-1723) にこう書いている。「川沿いの散歩道はとても心地よく、私の作った水路は素晴らしくきれいです。鱒が泳いでいるのが見えます。……今の私には、国事に手を出すよりも、柳の木の世話をしたり、生け垣の手入れをしたりする方が向いています」<sup>(38)</sup>。

赴任当初、ララカーの聖職領耕地は一エーカーしかなかった。そのためスウィフトは、地代収入を得るために耕地を広げる努力をしている。一七一六年の夏に隣人のジョン・パーシヴァルと土地の売買をめぐる交渉を開始、その年の終わりに二〇〇ポンドで二〇エーカーの土地を購入した。<sup>(39)</sup>だがそれだけでは満足できなかったようである。さらに二〇エーカーの土地を年間賃料一四ポンドと権利金五五ポンドという条件で借り受け、半永久的に使用できる永代借地契約を交わしている。その消息は、ダブリン大主教に宛てた契約成立直後の一七一六年二月二日付け書簡に明らかである。<sup>(40)</sup>乏しい資金ながらも土地を増やし、教会堂の修復や庭造りなどして全体を小ぎれにしたスウィフトは、終生この地を愛した。そしてここから得られる総額約二三〇ポンドの収入は、生涯にわたって彼の生計を支える重要な所得源となったのである。

こうして、スウィフトは教会の改善にエネルギーを注いだ。ところでわれわれはここで、土地問題を契機に彼の性格の一端を垣間見よう。スウィフトは隣人、すなわちパーシヴァルによる土地侵害に長年悩まされていた。パーシヴァルから土地を購入する二年ほど前、スウィフトはボーリングブルックにこう述べていた。「底意地の悪い隣人〔パーシヴァル〕が、私の敷地内に無断で六フィート入り込み、樹木を奪い去りました。そして私の木立を台



なしにしまいました。これはすべて掛け値なしに真実です<sup>(4)</sup>。先に引用したヴァネッサ宛書簡では、自分の手がけた散歩道や水路の美しさをいささか誇らしげに語り、国事よりも庭仕事の方が良いと言っていた。たしかにラカーの穏やかな自然は、後年、ロンドンでの政争に疲れ果てたスウィフトの心を癒す避難所のような役割を果たすものとなった。だがそうした癒しの空間は、スウィフトの考えでは、あくまでも「敷地内に無断で」侵入してくる不心得者がいないことが前提となっている。侵入者は、平穏を乱す敵であった。スウィフトは、そうした侵入者を食い止めなければならないとしたが、そのために必要不可欠とされたのが「柵」(fence)や「溝」(ditch)にほかならなかった。前出のヴァネッサ宛書簡は、次のような文章が続いている。「私は、作業員の一人に〔闖入する〕牛を私の土地 (the land) から追い払わせ、〔侵入を阻止するために〕もう一度溝を掘るよう命じなければなりません。これは田舎の教区牧師には、〔ロンドンで敵対する〕党派 (factions) を追い出し、彼らを寄せつけないために柵を設けるよりもはるかに適した仕事です<sup>(5)</sup>」。

スウィフトは、聖職領耕地に溝を掘って生け垣を巡らした。なるほどそれは、第一義的には景観のためであったかもしれない。だがそれは同時に、敵から財産を守るための城壁のようなものでもあった。柵と溝で侵入者を阻むという考えは、年齢を重ねるにつれていつそう強まっていく。「私は山を平らにし、石を積み上げ、……盗人たちを寄せつけないよう柵を設けています<sup>(6)</sup>」。これは、スウィフトにおける所有権意識の強さの表れであろう。もともと、今のわれわれには所有権に関する問題はさしあたり重要ではない。むしろ注目しておくべきは、土地の侵害を阻止するために作られた「柵」や「溝」が、財産という可視的なものとどまらず、自身の内面世界を守る砦としても捉えられていくことである。

スウィフトは自己防衛本能が強く、他人からの非難や攻撃に対してひととき敏感であった。彼は弱みを握られるのを恐れた。非難・攻撃されないよう常に堅固な城壁を築き、鎧に身を固めて己を守ろうとした。恋人ステラと会



うときは必ず第三者を交え、二人きりにならないよう細心の注意を払ったのも、世間で噂が立つて指弾されるのを恐れていたことであつた。

スウィフトの周囲には、常に目に見えない高い「柵」が設けられ、深い「溝」が横たわっていた。プライドの高さや傷つくことへの恐れが、そのようにさせたとも言えよう。だが敷地を囲む物理的バリアであれ、心の中に設ける心理的バリアであれ、自身を守るために障壁を築くのは誰にでも見られるいわば本能的なものである。それゆえスウィフトの特異性をことさら強調すべきではないが、ただスウィフトにおいて特徴的なのは、先のステラの一件からもわかるように、彼の「柵」や「溝」が他の人のものよりも高くて深かつたことである。とりわけ、自身のプライドが傷つけられることへの警戒心と恐怖心は強く、それに対する防御として、彼の心の中には常に強固なバリアが築かれていた。スウィフトは聖職者であるにもかかわらず、誰をも受け入れていくような大らかさに乏しかった。彼は、自分に刃向かつてくる敵対者はもとより、真つ当な批判者ですら懐深く受け止めることができなかった。それゆえ彼の人生は敵の多いそれであつたが、スウィフトの全体像を捉えるためには、彼のそうした側面にも十分目を配っていく必要がある。そして土地問題をめぐつて必要とされ、また敵対する「党派を追い出し、……彼らを寄せつけないため」に作られた「柵」と「溝」は、スウィフトの性格を特徴づける、まさしく一つの象徴であつたように思われるのである。

彼の性格に関連して、もう一点付言しておこう。自己防衛本能が強い人間は、しばしば攻撃的になる。自分を守るための反応が強ければ、非は自分ではなく他人にあると考えがちになり、その反応が激しければ激しいほど、相手への敵意も強まり攻撃的となる。実は、スウィフトにもその傾向があつた。彼は、自分に少しでも敵対してくる者がいれば徹底的に反撃した。それは情け容赦なく、相手が根負けするか、詫びを入れるまで執拗に続いた——もつとも、土地侵害で悩まされたパースヴァルについて言えば、二人はやがて和解し、先に見たように土地の売買契約

を結んでいる。その後の二人は、互いに仲の良い隣人となった。したがって、ひとたび敵と見なせば屈服するまで相手を追いつめ、手加減なしに攻撃していくというのはあくまでもスウィフトの一つの傾向であって、必ずしも常にそうであったというわけではない——。もちろん、気心知れた友人や無害な者には親切で寛大であった。しかし、そうでない者への攻撃は激しかった。そしてその方法は、言うまでもなく諷刺 (satire) という文学形式によってであった。

攻撃的性格は、社会生活においてはしばしばマイナスに作用する。だが諷刺にあつては、むしろ大きな効果を發揮する。諷刺文学は、怒りの対象を笑いという武器を用いて攻撃する。その意味で、諷刺文学とは笑いを含んだ「怒りの文学」であり、「攻撃の文学」である。諷刺の概念やその精神についてはすでに考察したので、ここでの縛言は控えるが、スウィフトは生涯にわたり、そのときどきのターゲットを辛辣に批判した。彼の諷刺は私憤に由来するのか、公憤に貫かれたものであるのかはここでは問わないでおこう。われわれとしては、彼の諷刺には時にはユーモアを交えつつも強い攻撃性が潜み、敵を近づけず、入り込めば柵と溝で囲まれたエリアから排除して、相手が降参するまで追いつめていくのが基本的な流儀であつたことを知っておくだけでよい。

スウィフトの攻撃の対象は多岐にわたる。とりわけ頻繁に標的にしたのは、政治の世界であつた。彼は政治権力の腐敗や不正を暴き、権力者の横暴にペンの力で立ち向かった。スウィフトの真骨頂は、まさしくここにあつた。だが彼の諷刺はそこにとどまらない。攻撃の矛先はやがて人間一般に向かい、ついには諷刺している自分自身にも向けられていく。そしてそこにこそ、スウィフトの諷刺の深さがあつたのである。

## (2) 聖務と生活

さて、本題に戻ろう。見てきたように、スウィフトは教会の改善に熱心に取り組んだ。しかしながら、最も重要

な牧師としての聖務にはさほど意欲的ではなかったようである。なるほど、一七二〇年のある手紙ではこう書いている。「今日は、少なくとも一五名の聴衆の前で説教をすることになっているので、今とても忙しくしています。聴衆の大半は育ちが良く、すべて純真な人たちです」。<sup>(45)</sup>サー・ウォルター・スコット (Sir Walter Scott, 1771-1832) も、次のように述べている。「ララカーでのスウィフトの生活は規則正しく、聖職者らしかった。彼は一週間に二度祈禱書を読み、日曜日には定期的に説教を行つた」。<sup>(46)</sup>こうした文言から判断すれば、スウィフトは教区牧師としての職務を誠実にこなしていたように思われよう。だが事実はそうではなかった。L・A・ランダも指摘したように、スウィフトの聖務は決して定期的なものではなく、普段はダブリンカトリムに居住し、ララカーを訪れた折りにとどき行へる程度であつた。<sup>(47)</sup>そして通常の聖務は、もっぱら牧師補 (curate) に任せていたのである。

教区教会には、教区主任牧師か教区代理牧師が常駐するのが原則であつた。だが聖職禄兼領ともなれば、牧師不在の教区が生じるのは自然な成り行きである。そうした場合は、教区牧師を助け、聖務を代行する牧師補が雇われるのが一般的であつた。キルルート時代のスウィフトは、三つの教区を兼領していたにもかかわらず、牧師補を雇っていた形跡はない。だがララカーではそうではなかった。彼はまず、スミスという人物を牧師補に任命している。この人物の詳細についてはまったく不明であるが、スウィフトは几帳面に「会計簿」(Account Book) をつけており、そこにスミスの名前と支払った報酬額が記録されている。それによれば、スウィフトは何回かに分けてスミスに総額三〇ポンドから四〇ポンド支給している。<sup>(48)</sup>当時、牧師補の年収は三〇ポンド程度であつた。その点からすれば、スミスの俸給は平均的か、少し上といったところであろう。<sup>(49)</sup>

スミスがいつまで牧師補をしていたかは定かでない。スミスの後任は、トマス・ウォーバートン (Thomas Warburton, 1679-1736) という人物である。ウォーバートンがスウィフトの代理を務めたのは一七〇九年頃から一七年まで、その後はマラフェルト (Magherafelt) 教区の主任牧師になっている。スウィフトは彼の人柄と能力を高

く評価していた。ウォーバートンのために、より恵まれた聖職に就けるよう高位の聖職者たちに働きかけしている。その点については、しかるべき箇所で改めて言及することにしよう。ウォーバートンの後任は、スウィフトの従兄弟であるウィロビー・スウィフト (Willoughby Swift, d. 1715) の娘婿スタフォード・ライトバーン (Stafford Lightburne, b. 1662) である。彼は、ウォーバートンが辞任して五年後の一七二二年から三三年まで牧師補として雇われた。ウィロビーは学生時代のスウィフトを経済的に援助しており、スウィフトにとっては恩人の一人であった。そうした人物の縁者である。恩義を感じていたのか、スウィフトはライトバーンにも支援を惜しまなかった。このライトバーンについても、詳細は別な機会に譲りたい。

ともかくも、スウィフトは安上がりにつく牧師補を雇って儀式や説教などの聖務を肩代わりさせた。そして彼らを通して、教区との繋がりを維持していった。ところで、聖職者の主たる収入源が十分の一税 (tithes) であったことは言うまでもない。それは、教会運営と聖職者の生計を支える最も重要な経済的基盤であった。しかしこの税は、土地の収穫物や経済的取得物の十分の一を教区民から毎年強制的に徴収するものであるがゆえに、それが制度化されるようになった中世以降、教区民にとっては常に不満の種であった。そのため税の取り立てには苦勞が伴い、期待どおりの徴収成果を上げられないことがよくあった。ちなみにスウィフトは、「十分の一税は神聖な制度であるにもかかわらず、それを徴収するのはひどく不愉快だ」と、友人のアレグザンダー・ポープ (Alexander Pope, 1688-1744) にこぼしている。

税の納入には二通りの方法があった。物納と金納である。時代とともに金納化が進んでいたが、物納の場合、まず聖職者が自分の生活のために必要量を受け取り、残りは代理人が町の市場で換金するというのが一般的であった。けれどもこの方法には、懸念材料が一つあった。けだしこの方法で事をスムーズに進めるためには、代理人の側に納められた物を適切に管理し売却する知識と誠実さが求められたが、すべての代理人が必ずしもそうであったわけ

ではなく、むしろその逆のことが多くあったのである。事実スウィフトも、長年この問題で頭を悩ませられたのであった。

ララカーにおける十分の一税の主たる対象品目は穀物類、とくに小麦であった。税の納入期は一月で、遅延する場合は二、三年後ということもあったようである。物品の評価額は、冬小麦は一エーカー当たり五シリング、春小麦は三シリングであった(一七三三年)。夏の牧草と干し草も重要な品目で、「会計簿」からそれらの多くが物納であったことがわかる。牧草地の評価額は、一エーカー当たり二シリング六ペンスであった(同年)。これら以外の品目には、羊毛、子羊、蜂蜜、ビールなどがあった。<sup>(51)</sup> スウィフトは、アイザイア・パーヴィソル(Isaiah Parvisol, c. 1718) という人物を地所差配人(land agent)、つまり代理人として雇って税の徴収に当たらせた。パーヴィソルは一七〇二年からこの仕事を任されている。だがスウィフトの目に映ったパーヴィソルは不誠実で無能、十分の一税を効率的に徴収することも、納められた物を適切に管理することもできなかった。そのためスウィフトは、一七〇八年以降の手紙で頻繁にパーヴィソルに言及し、その都度罵詈雑言を浴びせている。<sup>(52)</sup> やがて我慢できなくなって彼を解雇、だが三年後に再び雇用し、結局パーヴィソルの死まで雇っている。

支出の方に話題を転じよう。スウィフトのララカー赴任後の支出は、年によって変動はあるものの、年間およそ一六〇ポンドであった。先述したように、スウィフトは日々の収支を「会計簿」に几帳面に記録している。それによれば、大きな支出は牧師補の報酬三〇ポンドから四〇ポンド、ステラことエスター・ジョンソンへの手当五〇ポンドである。ステラの渡愛の経緯については別途論じるが、テンプルの屋敷に住んでいた二〇歳になったステラは、スウィフトの説得を受けて、一七〇一年八月にコンパニオン役のレベッカ・ディングリー(Rebecca Dingley, c. 1665-1743)とともにアイルランドへ渡り、トリムで暮らすことになった。それをきっかけに、スウィフトは生活費としてステラに毎年五〇ポンドを支給することにしたのである。<sup>(53)</sup> これら以外の支出には、牧師館の維持費一六ポンド

ド、召使いの給与四ポンド、ダブリンやロンドンでの部屋代と食事代一〇ポンド、普段の食費九シリング（週当たり）、食器九シリング、衣服・ハンカチ・帽子・カッラ・靴などの服飾雑貨一〇ポンドから二十数ポンド、馬の購入費四ポンドから一〇ポンド、馬の維持費一〇ポンド、その他、文具類、貧者への施し、友人へのプレゼント、御者や召使いへの心付け等々があった。<sup>(54)</sup>

「会計簿」は、これらの収支項目と金額を何のコメントも交えず淡々と記帳している。しかし一見何の変哲もない「会計簿」であるが、記載事項の一つ一つがさまざまなことを雄弁に語っている。すなわち、いつ、何にいくら使ったかを丹念に追跡することによって、ララカー時代のスウィフトの生活様式から彼のものの考え方や価値観に至るまで、実に多くのことを知ることができるのである。われわれは、折に触れてこの「会計簿」を参照していくであろう。

### (3) 聖パトリック大聖堂参事会員

ところで、スウィフトはララカーの聖職禄を与えられた七カ月後の一七〇〇年九月二八日に、聖パトリック大聖堂 (St. Patrick's Cathedral) の参事会員 (prebendary) になっている。より正確に言えば、同大聖堂の管轄下にあるウィックロー州ダンラヴィン (Dunlavin) の参事会員である。<sup>(55)</sup> 参事会員とは、大聖堂の収入（十分の一税、地代、家賃など）から聖職給 (Prebend) を受ける資格を与えられた聖職給受給有資格者のことである。聖パトリック大聖堂は、参事会員の俸給を生む一九の土地を有していたが、ダンラヴィンはそのうちの一つであり、序列的には全体の中で中位に位置づけられていた。<sup>(56)</sup>

この聖堂参事会員職は、もともととはジョン・ボルトンが保有していた。ボルトンはデリーの首席司祭に就任するにあたり、兼領していた聖職禄のうちのララカーを手放した。それがスウィフトに譲られたことはすでに見たとお

りであるが、実はこの参事会員職も手放しており、それが今回もスウィフトに回ってきたのである。スウィフトを推薦したのは、ダブリン大主教のナーシサス・マーシユである。ところが、彼の推薦はポルトンが放棄して七カ月も経ってからのことである。それほど間が空いたのは、おそらくマーシユがスウィフトを好まず、このポストをほかの人間に回したいと思っていたからであろう。スウィフトもそれに気づいており、あるエッセイでは、マーシユは能力のない「人間を推挙する秘訣を発見した。優秀な人たちを引き立てたところで、彼らは幸運に対するほどにはマーシユに感謝しない」と皮肉たっぷりに述べている。<sup>(57)</sup>

ダンラヴィンは、ダブリンから三〇マイルあまり南西に位置する小さな教区である。年収は約一五ポンドであった。<sup>(58)</sup> この少ない収入から牧師補への報酬を出さねばならず、数字だけを見れば、決して魅力的なポストではなかった。ローレンス・スターン (Laurence Sterne, 1713-68) は、旅行記らしからぬ旅行記である『センチメンタル・ジャーニー』(A Sentimental Journey through France and Italy, 1768) で、主人公の牧師ヨリックに向かって「教会での出世はおほつかないぞ」、「惨めな参事会員 (lousy prebendary) にしかなることができないぞ」と、ヨリック自身の本性に潜む「卑屈」(Meanness) と「誇り」(Pride) に言わせている。<sup>(59)</sup> 当時の参事会員に対する評価は、おそらくこの程度のものであったのだろう。しかしスウィフトの場合、参事会員職から受けた恩恵は小さくなかった。まず、教区での聖務はほとんどなく、年一回の首席司祭の教区巡察に立ち会うことぐらいであった。しかもそれとて、一七〇二年からの一〇年間に立ち会ったのはわずか五回のみ、聖堂参事会 (chapter) への出席も一三回にすぎなかった。<sup>(60)</sup> さらに大聖堂での説教も、参事会員の間で順番が回ってきたときに行えばよく、大して負担になるようなものではなかった。<sup>(61)</sup> スウィフトにとっては、一種の無任所聖職祿 (sinecure) であったのであり、決して魅力のないポストなどではなかったのである。

スウィフトの人生において、この参事会員職に就いた意味は大きかった。三三歳のときに聖職授任したスウィフ



トは、七八歳で死ぬまで、四五年間という長きにわたって聖パトリック大聖堂と関わっていくことになる。しかも四六歳のときには首席司祭に就任して、大聖堂との関係は切っても切れない強固なものとなっていくのである。またこの大聖堂をベースとしながら、イングランドの政治に関与していくということも彼の生涯において重要な意味を持っている。すなわち、参事会員として大聖堂の管理・運営に参加するとともに、それを通してだいにアイルランド教会の中で発言力を持ち、やがて初穂税 (First Fruits) の免除問題が起ると、アイルランド教会聖職者会議 (Convocation of the Church of Ireland) を代表して、イングランド政府との交渉を任されるようになるのである。それ以降、スウィフトは政界の大物たちと親しくなる。そして彼自身が、隠然たる政治的影響力を持つに至るのである。その意味で、参事会員になったことは、スウィフトのキャリアにとつてきわめて大きな意味があった。またそれは、宗教的野心を実現していくための重要な足がかりとなるものであった。さらに参事会員就任の一七ヵ月後には、ダブリンのトリニティ・カレッジで神学博士号を取得している。<sup>(62)</sup>これ以降、彼は「スウィフト博士」(Dr. Swift) と呼ばれるようになる。そしてこれによって教会での出世、具体的にはイングランドで主教になるという野望をいっそう強めていくことになるのである。

- (1) 拙稿「ダブリン・トリニティ・カレッジ時代のスウィフト」(『山梨大学教育人間科学部紀要』第四卷一号、二〇〇二年) 一六七―一八八頁、「スウィフトとテンブル」(『同』第四卷二号、二〇〇二年) 五七―八五頁、「キルルートのスウィフト」(『岡山大学教育学部研究集録』第一三六号、二〇〇七年) 四三―五二頁。
- (2) ドロシーの手紙については、拙稿「ドロシー・オズボーンの手紙(Ⅰ)(Ⅱ)(Ⅲ)」(『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』第一六一号、二〇一六年) 七七―八五頁、「同」第一六二号、二〇一六年) 一一―二二頁、「同」一六四号、二〇一七年) 四九―五五頁を参照願いたい。
- (3) Swift, "The Family of Swift," in *The Prose Writings of Jonathan Swift*, ed. Herbert Davis et al., 14 vols. (Oxford: Basil Blackwell, 1939-68), V, p. 194. (以下「本全集」*PW*と略記する。)

- (4) *Oxford Dictionary of National Biography*, s.v. "Sidney, Henry, First Earl of Romney".
- (5) Gilbert Burnet, *History of His Own Time, with Notes by the Earls of Dartmouth and Hardwicke, Speaker Onslow, and Dean Swift*, 6 vols. (Oxford, 1823), IV, p. 8.
- (6) Swift, "Family of Swift," in *PW*, V, p. 195.
- (7) Swift, "The Problem," in *Jonathan Swift: The Complete Poems*, ed. Pat Rogers (Harmondsworth: Penguin Books, 1983), pp. 82-83. (以下、本書集の *Complete Poems* の註記を参照)
- (8) S. J. Connolly (ed.), *Oxford Companion to Irish History*, 2nd edn. (Oxford: Oxford University Press, 2002), p. 345.
- (9) Swift, "Family of Swift," in *PW*, V, p. 195.
- (10) Irvin Ehrenpreis, *Swift: The Man, His Works, and the Age*, 3 vols. (London: Methuen, 1962-83), II, pp. 6-7.
- (11) Swift, "Family of Swift," in *PW*, V, p. 195.
- (12) Swift, "The Discovery," in *Complete Poems*, pp. 83-85.
- (13) Swift, "Family of Swift," in *PW*, V, p. 195. 以下は註記を参照を要する。Deane Swift, *An Essay upon the Life, Writings, and Character of Dr. Jonathan Swift*, Swiftiana XIV (1755; rpt. New York: Garland Publishing, 1974), pp. 112-14; John Hawkesworth, *An Account of the Life of the Reverend Jonathan Swift, D.D., Dean of St. Patrick's, Dublin*, in *Three Biographical Pamphlets, 1745-1758*, Swiftiana XIII (1755; rpt. New York: Garland Publishing, 1975), p. 8; W. H. Dilworth, *The Life of Dr. Jonathan Swift, Dean of Saint Patrick's, Dublin*, 1758, in *ibid.*, pp. 11-12; Walter Scott, *Memoirs of Jonathan Swift, D.D., Dean of St. Patrick's, Dublin*, 2 vols. (Paris, 1826), p. 59; John Forster, *The Life of Jonathan Swift*, vol. I (London, 1875), pp. 109-10; Henry Craik, *The Life of Jonathan Swift*, 2nd edn., 2 vols. (1894; rpt. New York: Burt Franklin, 1969), I, p. 99.
- (14) Thomas Sheridan, *The Life of the Rev. Dr. Jonathan Swift, Dean of St. Patrick's, Dublin*, Swiftiana XV (1784; rpt. New York: Garland Publishing, 1974), pp. 33-34.
- (15) Louis A. Landa, *Swift and the Church of Ireland* (Oxford: Clarendon Press, 1965), pp. 29-32; Ehrenpreis, *Swift*, II, pp. 9-11.
- (16) トーシェにのこるのは、拙稿「ダブリン・トリニティ・カレッジ時代のスウィフト」一六八—一六九頁を参照しつゝなされたこと。
- (17) Landa, *Swift and the Church of Ireland*, p. 30.
- (18) ボルトンが辞退したあと、高等法院は次なる適任者としてエドワード・シングに打診している。しかし彼も家庭の事情から断り、結局、話は振り出しに戻って、ボルトンへの妥協案の提示ということになったのである。なお、候補に挙がったスター

ン、シング、ボルトンの三名は、のちにスウィフトと強い関係を持つことになる。

- (19) Swift, "Family of Swift," in *PW*, V, p. 195, 1777で言われている三〇歳という数字は正確ではない。人選が始まった一七〇〇年の一月に、彼はすでに三二歳になっていた。

- (20) Ehrenpreis, *Swift*, II, p. 12.

- (21) 教区主任牧師と教区代理牧師については、拙稿「キルロートのスウィフト」四五頁で簡単に説明している。

- (22) John Boyle, 5th Earl of Cork and Orrey, *Remarks on the Life and Writings of Dr. Jonathan Swift*, ed. João Fróis (Newark: University of Delaware Press; London: Associated University Presses, 2000), p. 99, n. 12.

- (23) John Healy, *History of the Diocese of Meath*, 2 vols. (Dublin: Association for Promoting Christian Knowledge, 1908), II, pp. 14-15; Landa, *Swift and the Church of Ireland*, p. 35. なお、スウィフトが着任したときのミーズ主教はリチャード・テニスン(Richard Tenison, 1642-1705)であった。ミーズ主教になる前はクロージャー主教を務め、優れた説教で多くの非国教徒をアイランズ教会に改宗させたことで知られていた。トリニティ・カレッジ時代のスウィフトの友人ヘンリー・テニスン(Henry Tenison, 1666/7-1709)は、彼の息子である。また、テニスンの後任としてクロージャー主教になったのは、カレッジ時代のスウィフトのチューターで、彼に新しい科学的知識を付与したセント・ジョージ・アッシュ(St. George Ashe, 1658-1718)であった。

- (24) Landa, *Swift and the Church of Ireland*, p. 36.

- (25) *Ibid.*, p. 37.

- (26) *Ibid.*, pp. 42-43.

- (27) *Ibid.*, p. 43.

- (28) *Ibid.*, p. 42.

- (29) *Ibid.*, pp. 37, 43, 44; Ehrenpreis, *Swift*, II, p. 96.

- (30) Swift, "Family of Swift," in *PW*, V, p. 195.

- (31) Joseph McMinn, *Jonathan's Travels: Swift and Ireland* (Belfast: Appletree Press; New York: St. Martin's Press, 1994), p. 41.

- (32) Swift to Jane Waring (4 May 1700), in *The Correspondence of Jonathan Swift, D.D.*, ed. David Woolley, 4 vols. (Frankfurt am Main: Peter Lang, 1999-2007), I, p. 141. (以下、本書簡集は*Corr.*、略記は*s.*)

- (33) Paul V. Thompson and Dorothy J. Thompson (eds.), *The Account Books of Jonathan Swift* (Newark: University of

- Delaware Press, London: Scholar Press, 1984), pp. cxi-cxii.
- (25) Swift to Viscount Bolingbroke (14 Sep. 1714), in *Corr.*, II, p. 79.
- (26) Arthur Young, *A Tour in Ireland*, ed. Constantia Maxwell (1925; rpt. Belfast: Blackstaff Press, 1983), p. 183.
- (27) Swift to Esther Vanhomrigh (8 July 1713), in *Corr.*, I, p. 513.
- (28) Forster, *Life of Jonathan Swift*, I, p. 121, n.; Landa, *Swift and the Church of Ireland*, pp. 37, 39; Ehrenpreis, *Swift*, II, p. 94.
- (29) Swift to Esther Vanhomrigh (8 July 1713), in *Corr.*, I, pp. 513-14.
- (30) Edward Synge, *A Brief Account of the Laws Now in Force in the Kingdom of Ireland, for Encouraging the Residence of the Parochial Clergy, and Erecting of English Schools* (Dublin, 1723), Appendix, p. 51.
- (40) Swift to Archbishop King (22 Dec. 1716), in *Corr.*, II, p. 203. ランダは「借り受けた土地は二三エーカーとしてゐるが (Landa, *Swift and the Church of Ireland*, p. 40)」「戸二ハ十一〇エーカーである。
- (41) Swift to Viscount Bolingbroke (14 Sep. 1714), in *Corr.*, II, p. 79.
- (42) Swift to Esther Vanhomrigh (8 July 1713), in *Corr.*, I, p. 514.
- (43) Swift to Knighley Chetwode (27 May 1725), in *Corr.*, II, p. 554.
- (44) 拙稿「諷刺の精神とスウィフト (一) (二)」(『山梨大学教育人間科学部紀要』第五卷一号、二〇〇三年) 一四八—七七頁、「同」第五卷二号、二〇〇三年) 二二八—四七頁。
- (45) Swift to Dean Stearne (17 Apr. 1710), in *Corr.*, I, p. 279.
- (46) Walter Scott, *Memoirs of Jonathan Swift, D.D., Dean of St. Patrick's, Dublin*, 2 vols. (Paris, 1826), I, p. 66; *The Works of Jonathan Swift, Containing Additional Letters, Tracts, and Poems Not Hitherto Published*, ed. Sir Walter Scott, 2nd edn., 19 vols. (London, 1883-84), I, p. 60.
- (47) Landa, *Swift and the Church of Ireland*, p. 38.
- (48) P. V. Thompson and D. J. Thompson (eds.), *Account Books of Jonathan Swift*, pp. 28-29, 32, 50-51.
- (49) エーレンプライスは「スウィフトはスミスに基本給として年俸五七ポンド支払い、追加の仕事をする場合は特別手当を支給していたとしている (Ehrenpreis, *Swift*, II, p. 97)。だが特別手当はともかくとして、少なくとも会計簿から基本給五七ポンドという数字を確認することはできない。スウィフトは節儉家で、その生活は常につましかった。とはいえ、他人に対して吝嗇であつたわけではなく、むしろ気前の良いところが、貧窮者に対しては慈善心もあつた。もしスミスに支払った金額がエーレンプライスの言うとおりだとすれば、相場をはるかに超える俸給は、スウィフトのそうした傾向の表れであつたと言えよう。

あるいは、聖職禄が少ないとこぼしていたのとは裏腹に、実はララカー教区の重要性を認識していた証左と言うべきかもしれない。

- (50) Swift to Alexander Pope (26 Feb. 1729), in *Corr.* III, p. 285.
- (51) P. V. Thompson and D. J. Thompson (eds.), *Account Books of Jonathan Swift*, pp. xciv-xcvi.
- (52) たとえば Swift to Achdeacon Walls (3 July 1714), in *Corr.* I, pp. 632-33を参照。
- (53) P. V. Thompson and D. J. Thompson (eds.), *Account Books of Jonathan Swift*, pp. xxxv-xli.
- (54) スウィフトは強い経済観念を持っていた。土地の購入や永代借地をしたのもその表れである。彼は、家計に関する助言者および雑役係として、ジョゼフ・ポーモント (Joseph Beaumont, d. 1731) という人物を雇っている。ポーモントはリンネルと雑貨を扱うトリムの商人で、長年スウィフトに献身的に仕えた。その仕事内容は、経済上のさまざまな助言、食品・嗜好品・食器・日用品・酒類の調達、家屋の建築場所の決定や立面図の作成、洗濯や借馬の世話など、スウィフトの生活全般にわたっている。そのため、「会計簿」にはポーモントの名前が頻繁に出てくる。スウィフトの信頼厚く、アイルランドにおける彼の親しい友人の一人であった。だが次第に精神を病み、やがて自分で命を絶っている。なお、スウィフトの支出については以下を参照。Ehrenpreis, *Swift*, II, pp. 97-99; David Nokes, *Jonathan Swift, A Hypocrite Reversed: A Critical Biography* (Oxford: Oxford University Press, 1985), pp. 63-64; 三浦謙『炎の軌跡——ジョナサン・スウィフトの生涯』(南雲堂、一九九四年) 四八頁。
- (55) 正式に聖職授任したのは、一カ月ほどのちの10月22日である。
- (56) William Monck Mason, *The History and Antiquities of the Collegiate and Cathedral Church of St. Patrick near Dublin, from Its Foundation in 1190, to the Year 1819* ..... (Dublin, 1820), pp. 48-68; Landa, *Swift and the Church of Ireland*, p. 45.
- (57) Swift, "A Character of Primate Marsh," in *PW*, V, p. 211.
- (58) ちなみに、一七〇八年の収入は「会計簿」によれば「三ポンド五シリング二ペンスであった。P. V. Thompson and D. J. Thompson (eds.), *Account Books of Jonathan Swift*, p. 88.
- (59) Laurence Sterne, *A Sentimental Journey through France and Italy*, in *The Complete Works and Life of Laurence Sterne*, ed. Wilbur L. Cross, 6 vols. (1904; rpt. AMS Press, 1970), III, p. 73 (松村達雄訳『ヤンチャメンタル・ジャーニー』岩波書店、一九五二年、三六頁)。
- (60) Foster, *Life of Jonathan Swift*, I, pp. 16-17; Landa, *Swift and the Church of Ireland*, p. 47.
- (61) L. A. ランダによれば、スウィフトが職務を十分に果たさなかったのは、その多くが、初穂税免除のような教会全体に関

わる仕事や政治的影響力を行使するような活動に携わっていたからであって、そのような場合、職務を十分に果たせなくても問題視されることはなかった。スウィフトは、いわば特別であったのである。Landa, *Swift and the Church of Ireland*, p. 46.

(62) 学位を取得するのに特別な勉強は必要なかった。その代わり、酒食を供して関係者をもてなさねばならず、スウィフトは、手数料と饗応に年収の五分の一に当たる四四ポンド使っている。学位が授与されたのは、一七〇二年二月一六日であった。Ehrenpreis, *Swift*, II, p. 76; Leo Damrosch, *Jonathan Swift: His Life and His World* (New Haven: Yale University Press, 2013), p. 101.